

論文の和文概要

氏 名 久保山 和彦

(博士論文の題目)

柔道整復術の創出事情に関する史的研究
-柔道の近代化過程(柔術から柔道へ)に着目して-

(博士論文の概要)

概要

本研究は、日本の戦国時代以降に発達したといわれる伝統武術としての「柔術」が、近代に入ってから、伝統を保持しながら近代化(西洋化)していった様態を検討することにより、伝統医学と称される「柔道整復術」が、創出された過程を明らかにしたものである。

この目的を達成するために本論を二部構成とした。第Ⅰ部では、「近世中・後期における柔術と骨接ぎ術」と題して、近代に創出された柔道整復術の誕生の歴史的前提を明らかにした。この時代の柔術は「逮捕術」、「養生法」、及び「精神修養」などの多様な目的に適用しようとしたものであり、その技術は「禅思想」に影響を受けた陰陽五行論の中国「医学」の理論に基づくものであった。これに注目したのが大名家であった。彼らは「養生法」として受け入れるが、その試みは、柔術を「身体運動」として位置づけ、運動の「健康」に及ぼす効果に着目するのであった。為政者にとっての健康は、運動により保持・増進されるものとなり、「家訓」として子孫に伝承されていった。

江戸後(幕末)期、流通の拠点となっていた江戸・大阪・京都・長崎などの地は、都市化がすすみ経済の中心地となり、人・物や情報などの集積する場となった。これによって武術界は各流派が合流する傾向を示し、限定された「地域」や「身分」の枠組は崩れ、「人材」の流出によって文化の「混合」がはじまった。

ゆえに、この時期の医・薬などの学問を、武術の担い手は吸収しはじめ、中国医学と蘭学や西洋医学の実証的な解剖・生理学とが融合化する「身体観」が誕生して、柔術の「伝書」に導入されるようになった。

その影響下、元来、武術の「身体観」を規定していた「禅」や「中国医学」

の理論は後退し、柔術界では解剖・生理学などの西洋医学の「身体観」が、これに代わった。

幕末国内の戦乱のなか戦士の銃創・刀傷などの出血をとまなう外傷を専門に治療した「軍陣外科」が台頭したことで、「武術」と「医術」の境界線が引かれ、「健康」や「医術」に接点をもっていた柔術界は、整骨や骨接ぎなどの医者 of 臨床的知見を取り入れながら、蘇生術、骨折や脱臼など柔術に連なる施術を「活法」として担うようになった。それは柔術の延長線上にある「治療対象」に限られ、軍陣医学が扱わない(出血などを伴わない)打ち身、くじき、脱臼、骨折などの怪我の対処や薬法、また気絶者の蘇生術を担うようになった。いずれも柔術の「道場」など、「戦場」の準備段階で必要とされるものが対象となり、武術者の「心得」として皆伝者に与えられる「活法」に一元化された。

第Ⅱ部では「近代における柔術の柔道への変容と柔道整復術」と題して検討した。明治期を迎えて武術の担い手は、「幕府」の崩壊によって失職したことから、武術界は新たな「生計」の模索をはじめた。その一環としてはじめられた「撃剣興行」などは一時的なものに終わる。そのような状況下において有効策となったのは、武術の特性を生かした「警察」への就職であった。

日清・日露戦争に勝利し、国際舞台に打って出た明治国家は、武術の「精神性」に着目し、また「武士道」が語られるようになる。これに乗じ武術界は「武徳会」を結成し、これを国民の精神修養の「装置」として活動し、復興をかけて名乗りを上げた。武術は、その存在意義を「精神修養」に位置づけたことで、国家もこれに感応した。またこれは、国民への「体操」普及がすすむなか「体操」普及の方策は、教材選定から教員養成へと及び、また国民の家庭内に健康への意識改革を計り、体操の目的にあげられた「強兵」に「健康」が付加された。

同時期の柔術界では「講道館柔道」が台頭して、実践力で柔術を凌駕した。また、教育界で名をあげた創始者(嘉納治五郎)が目指す、柔術の「体操化」の動きが、柔術者の支えにより次第に形作られ「柔道」へと変容・進展した。

こうして柔道は「体操の教育法」に適合し、国家が認める体操「教材」として国民に普及し、江戸期すでに準備されていた柔術の「健康観」は、「柔道」を経由して国民に受容されはじめた。

一方の柔術は、「精神修養」という「精神」面の使途が強調され、また警察の武術として犯人の逮捕術に適応した。

この頃、柔術「接骨術」を庶民の治療に用いてきた「道場主」は、医療制度の枠組の臨界に迫いやられ「従来接骨術」の担い手となっていた。彼らは「柔術」及び「接骨術」の復興と存続を目指した「期成会」を結成して、「政治」・「理論」的な武装を計り、国に折衝を挑んだ。

また、全国民を対象として普及が計られた西洋式の「体操理論」は、解剖・生理学など基礎医学理論に基づいており「姿勢矯正」や「結核治療」など「健康」に直結していた。ゆえに「身体運動」は「健康・医療」と重ねられ、近代化に成功した「柔道」は、この要件を柔術者の尽力もあり、備えたことで学校体操の正科教材となった。

明治期における柔術道場主にとって経営を支える「接骨術」の存続は、同時に柔術を存続させることに繋がる。柔術から近代に適応した「柔道」にその方法を倣い、理論構築（「西洋体操理論」）により規定された「衛生観」に寄り添う「接骨術」に改変し、技術の連続性を保ちつつ復興の活動をすすめた。

しかしながら、明治期の医療制度が定着しはじめると、「接骨術」は医術分野の専門となり、また「整形外科」は充実してくると、柔術から離断することとなったのである。

こうしたなか、柔術界では柔道化がすすんでいた。道場主の「期成会」の中心は「柔道」を教授するようになっていたのである。

「接骨術」が「医療制度」の上に乗るのは大正 9 (1920) 年のことであり、その復権活動には、「天神真楊流柔術」を出自とする柔術界が中心となりすすめられたが、「按摩規則」の一部に「柔道整復術」が加えられた。その後は昭和 22 (1947) 年に『按摩はりきゅう柔道整復等営業法』が制定され、昭和 26 (1951) 年の文部厚生共同省令により、「柔道整復師」の学校養成施設が開設された。

『柔道整復師法』として単独法となったのは昭和 45 (1970) 年のことである。

以上のことから近世以来の柔術の「接骨術」は、近代の「柔術」から「柔道」への移行期に創出されたといえ、柔道整復術を併用する道場展開により、「柔道」は、国民に広く普及した。

論文の欧文概要

(Name) KAZUHIKO KUBOYAMA

(Title)

**A historical study of the constitution process of Judo-seifuku-jutsu,
focusing on the transition from Jujutsu to Judo**

(Abstract)

The rise and expansion of Jujutsu in the modern era are characterized by social hierarchy and the variety of ways in which the martial art is used. This new rise of jujutsu has been affected by Kodokan Judo.

Jujutsu was a part of Judo in the Meiji era, and was utilized to educate the aristocracy, who also served as Japan's statesmen. During this period, Judo was popular because it is an active physical exercise that involves a kind of gymnastics (*taisou*). Due to its burst of popularity during the era, it was used for physical education, sports, and moral training among the *Bushi*. During the same period, jujutsu treatment techniques such as *Kappo* were gradually adapted for use as osteopathic treatments, and came to play an important role in the treatment of injuries in traditional Japanese medicine.

Following the transition from Jujutsu to Judo, Judo became popular among the common people, and over time Judo-seifuku-jujutsu played an important role in popularizing Judo as part of a familiar exercise culture.